
【巻頭言】

健康・運動の疫学研究が目指すもの—健康支援学からの提言—： 危険因子から健康因子探索へ

熊谷 秋三^{1,2)}

1) 九州大学健康科学センター

2) 九州大学大学院人間環境学研究院

著者は、現代のエスプリ誌上で過去に2つの健康支援モデル（疾病オリエンテッドとライス支援モデル）に基づく健康政策の比較を行ったことがある（現代のエスプリ, 440: 38-46, 2004/2）。ここでは、その論理を紹介し、健康と運動の疫学研究が目指す方向性を考えてみたい。

「ライフ支援モデル」は、疾病のない人々の健康状態や QOL に着眼した点で、WHO のヘルス・プロモーションにおける健康の定義を目標としており、積極的な意義がある。しかし、このモデルは、「疾病対策モデル」の一種のアンチテーゼとして生まれてきたものである。そのこと自体に問題があるわけではないが、発想の根幹が共通しているという意味においては、「疾病対策モデル」、いいかえれば「疾病オリエンテッド」の発想の域を超え得ないことが懸念されることを指摘した。

疾病生成論（Pathogenesis）を中核とした「疾病オリエンテッド」の発想というのは、人々の健康の病的な側面や疾病の発生・重症化を促す可能性の危険要因（リスクファクター）の低減、除去に関心を集中させる見方である。ヘルス・プロモーション活動において、「疾病オリエンテッド」なものの見方に限界があるとすれば、それは、健康の犠牲者や被害者がなぜライフスタイルの改善を行うことができなかったのか、またその社会的背景には何があるのか、という視点が欠如しやすいことにあることも指摘した。

更に、「ライフ支援モデル」では、本人の役割として、「自己効力感を重視」することであるとしているが、ここで自己効力感を持つことのできない人々を批判することは好ましいことではない。victim-blaming は、「健康はよいもの・病気は悪いもの」という前提に立った支援者・被支援者という関係から生まれるのであるから、これを超越するためには、健康や疾病に対する全く異なる発想や問い、仮説を立てることが必要となってくる。つまり、今後ヘルス・プロモーションにおいて求められている健康に対する発想というのは、健康生成論（Salutogenesis）に基づき、人々の持つ健康を維持する力、すなわち健康要因（サリュータリーファクター）に着眼し、そこに働きかけることを通じて、健康の支援を図ることではないだろうかと提案した。

高度経済成長も終焉し、経済的繁栄に伴い衛生環境も整った現代日本においては、モノの豊かさから、生活の質や心の豊かさなどを人々が希求するようになり、明らかに、健康増進に関するパラダイムシフトが必要な時代になったといえる。現実を目を向ければ、同じような頻度・量のストレスや危険因子に遭遇しても健康を保てる人と破綻する人が存在する。そこで、人間は健康-健康破綻の連続体上にあつて、その軸上のどこに個人が位置しているかという見方を行い、健康の極側へ人々を移動しやすくしているものは何かを明らかにする「健康生成論」が着目されるようになってきた。今後の健康政策においては、新しい概念である健康生成論への転換を図り、ストレスや健康にとって好ましくない生活習慣等の危険要因がたとえ存在しても疾病に至らず健康な状態を維持する役目を果たす健康要因を解明し、そうした「健康生成・保持能力」を育成する社会環境づくりをも達成することによって、最終的には幸福感や人生満足感、QOL の向上を目標とした新しい健康のあり方が求められている。

これまでの臨床疫学は、疾病生成論的な観点から危険因子探しに躍起になってきた。しかし、同一の危険因子やストレスの存在にもかかわらず、疾病を発症しない集団特性や要因に関しては何も触れられていない。例えば、ガン遺伝子が発見されたからといって、ガンの発症の因果関係が明らかにできたわけではない。また、ガン遺伝子を持つ人がガンを発症しないこともあることに関しては何も説明されていない。アラメダ郡研究では、健康要因に関する興味深い成績が報告されている。その研究では、日常

生活での望ましい健康行動数が少ないほど心疾患による死亡率が高いことが報告されているが、更に健康行動数別にソーシャルサポートの高低で区分した場合、ソーシャルサポートが最も高い群は最も低い群に比べ、心疾患による死亡率が半減することが明らかとされた。すなわち、この場合ソーシャルサポートの高いことが健康生成論で言う健康要因であると考えられるのではないだろうか。一方、健康の社会・環境要因モデルが提唱されるに至り、健康の不平等の存在（経済、教育歴、ソーシャルサポートなどが疾病や要支援・要介護状態などを規定）が実証されつつある。

私は健康や運動の疫学研究とは、人々の健康状態を規定している危険因子のみでなく、健康生成論に基づく健康要因の解明に向けた研究分野であろうと考えている。